琉球大学学術リポジトリ

沖縄県における高校中退者・不登校生徒の進路意識に関する総合的研究

メタデータ	言語: 出版者: 藤原幸男 公開日: 2009-07-28 キーワード (Ja): 学校評価, 高校中退, 進路意識, 沖縄文化, 中退体験, 青年期, 学校改革, 生活設計, シマ共同体, アイデンティティ, 適格主義, 深夜アルバイト, 教師の対応, 学区制, 適格者主義 キーワード (En): Okinawa historical-cultural structure, consciousness on Life course and school, adolescence, school evaluation, highschool dropout, school reform, identity, school dropout experience 作成者: 藤原, 幸男, 照本, 祥敬, 長谷川, 裕, 村上, 呂里, 三村, 和則, Fujiwara, Yukio, Terumoto, Hirotaka, Hasegawa, Yutaka, Murakami, Rori, Mimura, Kazunori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/11529

おわりに

――ディスカッションを終えて――

照本祥敬

ディスカッションを開始するにあたり、「論点」らしきものとしてあらかじめ確認したのは4つの点である。

1．「共同体的関係」あるいは「共同体の論理」とはなにをさすのか。こうしたものを強調する根拠はなにか。
2．「共同体的」なものとこれとは異なるものとの関係をどうつかむのか。
3．ジェンダーの視点からみた場合、「共同体」的なものの内実をどう描けるのか。
4．調査研究を終えたいまの時点で、この島の「中退」をめぐる課題とどのように向きあうのか。

以下、これら4つの論点にそってディスカッションの内容を（多分に私見を交えることになるが）整理・補足しつつ、この島での3年間の調査研究に関する報告を終えることにしたい。

論点1について

この論点は、長谷川から提出された。この島の「中退」の全体像をとらえる認識枠組みの中心に「シマ共同体」の固有性を位置づける村上および照本への問いである。

議論の内容を2つに分節化すれば、(1)他者との相互扶助的関係や親密性をどう評価するのか、(2)こうした関係性の基盤にあるものをどうつかむのか、ということになろう。

たしかに、相互扶助的な関係や親密さを「共同体的」なものとして特定することはできない。しかし、この島の場合、これらの関係性は契約社会的な論理のなかで成立しているのではないこと、また関係が成立している単位として「地域」を意識することができることなどの点から、「共同体的関係」の強さを指摘できのではないかと村上は考える。

この「共同体的関係」の基盤にあるのはなにか。この関係を成立させている必然性をどこにみるのか。照本の「共同体の論理」という形容は、「結」を軸にするこの島の生産様式、生活様式のなかに、村上のいう「共同体的関係」の成立基盤をとらえていることによる。

しかしなお、この「共同体的」なるものの実像を全体的かつ具体的にどうつかむのかについては、必ずしもクリアーにはなっていない。この点の掘り下げを意識しながら、2および3の論点に議論は移行する。

論点2について

2および3の論点は、村上から提出された。「共同体的」なものとこれとは異なるものとの関係について、村上が「交じり合い・葛藤」としているのにたいして、照本は「（前者に後者が）包み込まれている」とする。両者の関係を「緊張」とみるのか「包摂」とみるのか、ということである。

ディスカッションでの内容とはやや異なるかもしれないが、どちらかといえば、「緊張」においてとらえることの方にリアリティがあるように思う。両者の関係は、Ⅰで村上が述べているように、「共同体」としての要求と「個人ないしは家族」的な要求との「交じり合い・

葛藤」として浮かび上がりつつあり、こうしたかたちで表現される両者の「緊張」は今後ますます顕在化していくだろうからである。また、このことは、必然的に、「学歴」を必要としない＝「学歴」を「一人前」の有力な条件とはしない共同体の論理をおおきく揺るがすものともなっていくだろうからである。

ただ、こうした客観的条件の変化の渦中にありながらも、この島では、いまなお子ども・青年の成長をまなざす「共同体」としての視線がおとなたちに共有されているのではないか。それは、たとえば、TさんがMさんやHさんと〈出会いなおす〉なかで、すなわち彼らの青年期遍歴の内実を知るなかで、当初の「中退」像をシマ共同体の論理にもとづいて修正していったことからもうかがえるのではないか。照本が「包摂」とみたのは、共同体の生活論理とともに、この論理に支えられたおとなたちのなかにあるこのような「構え」にウエイトをおいたことによる。

論点3について

ジェンダーの視点から「共同体的」なものを照射した場合、そこになにがみえてくるのか。この論点の設定は、「シマ共同体」として括ることによって、わたしたちの認識枠組みからこぼれ落ちてしまうものはないのか、という問いが下敷きになっている。

村上が指摘するのは、女子に見られる「性差」「結婚」「家族」にたいする「共同体的」な規範の強さである。あるいは、シマンチュの生活論理や生活感覚のなかに溶け込んでいる「性差」「家族」への構えである。

条件的な面での困難さもあり、この島での女性への聞き取りは量的に十分ではなかったが、それでも、この島の生活論理が、(沖縄全体にほぼ共通することではあるが)「男社会」のそれであることは間違いがないように思う。その一つの論拠が、村上が指摘した、「外」にいるわたしたちには「男社会」や「家父長的な家族観」の象徴とみえるような事象について、島の人びとが性差を問わず、まったくそのような意識をもたずに暮らしている事実である。「家父長的な家族観」を補強している、という観点からもシマ共同体の実像にアプローチしていく必要があるのではないか、と照本が述べているのはこうしたことによる。

しかし、こうした評価の主要な根拠となっているのは、「一人前」像についてのインタビュー内容の分析であり、そもそも「一人前」というコトバ自体が、男性が「成人」となりゆく、という意味あいを帯びたものだったのではないか。したがって、インタビューのなかで「性差」をめぐる差異が鮮明になっていないのは当然のことなのではないか。長谷川が指摘するのは、こういうことであろう。

この指摘のとおりであれば、「一人前」というコトバを用いることによって、そこに潜み込んでいるかもしれない「性差」が無意識のうちに前提にされていたことになる。この点については、「一人前」というコトバのもつ意味あいと、その受容のありようについて、わたしたち自身と島に暮らす人びととを交差させつつ、再度検討してみる必要があるように思う。

論点4について

この論点は照本が提出した。わたしたちの課題意識の1つは、中退（者）にたいして付与されるステレオタイプの評価、たとえば「挫折」や「甘え」といった評価とは異なる文脈での「中退」像を描きだすことにあった。この研究意図は、ある程度まで達成することができたのではないかと思う。

しかし、「中退」をどのように描きだすのか、

ということとは別に、「中退」をめぐる問題がこの島の現在および未来にとってどのような現実的意味をもちえるのか、この点を明らかにする課題がわたしたちには残されている。それは、近代（学校）教育システムを相対化する可能性を探っていくことなのか、という村上の問いにたいして、そのことにもつながるが、MさんやHさんが追求している学びの世界を共有できるような“学びの共同体”へとこの島がなりゆく可能性を探ることだ、というように照本が述べているのはこうした課題意識による。

村上は、この“学びの共同体”の可能性を追求していくための条件として、(1)共同体内部における世代間交流と、(2)「外」の世界との交流を指摘する。長谷川の青年会活動の展開についての評価に照らせば、この〈交流〉の中身を新たにどう創りだしていくのかが重要な鍵になってこよう。そこでの「学び」は、もちろん「学校」的なものである必要はないし、また、必ずしも「青年会」的なものである必要もないだろう。重要なのは、おとな、青年、子ども世代が、それぞれに「外」との交流のあり方を追求しつつ、シマ共同体における生活文化の発見・創造に参加していくことである。

新たな学びの世界の構築の契機は、このプロセスを世代間交流をとおして立ち上げていくこと、その際の〈参加〉の形態や内実を具体化していくことのなかに胚胎されているように思う。